1部77円(税込み)

対がん協会報

第771号　2026年(令和８年)10月１日(毎月１日発行)

主な内容
６面　厚労省、人口動態統計(確定数)を発表
７面　「ピンクリボンフェス」矢方美紀さんと麻倉未稀さんが出演
８面　都内の銭湯でブレスト・アウェアネス考える「気づきの湯」

公益財団法人　日本対がん協会　「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です

〒104－0045　東京都中央区築地５－３－３　築地浜離宮ビル７階
☎ 03－3541－4771　FAX 03－3541－4783　https://www.jcancer.jp/

2026年度 がん征圧全国大会 秋田大会を開催

「“美の国あきた”から　サキホコレ　がん征圧の花」

組織型検診実現へ課題共有　対がん活動功労者ら顕彰

がん征圧月間にちなみ、2026年度がん征圧全国大会秋田大会が９月11日、秋田市のあきた芸術劇場ミルハスで開かれた。日本対がん協会と秋田県総合保健事業団(日本対がん協会秋田県支部)の主催。全国のグループ支部、行政・医療関係者ら約500人が集まり、組織型検診の実現への課題やがん患者・家族の支援など、これからの対がん活動に必要な取り組みを共有した。

▼２～３面＝記念シンポジウム　４面＝表彰式



秋田市で開催された2026年度がん征圧全国大会秋田大会

秋田県での全国大会開催は1987年以来２回目の開催になる。第59回のテーマは「“美の国あきた”から　サキホコレ　がん征圧の花」。前日の９月10日には記念シンポジウムがあり、組織型がん検診の導入に向けた課題や、科学的根拠に基づくがん検診に向けた取り組みなどについて、医療、行政の専門家やグループ支部の検診担当者が意見を交わした。



戸堀文雄理事長

全国大会では、開会式で秋田県総合保健事業団の戸堀文雄理事長が「この秋田からがん征圧の花が全国に咲き誇り、そして１日でも早くがん征圧の実りがありますことを祈念している」とあいさつ。



垣添忠生会長

日本対がん協会の垣添忠生会長は「協会は『がんで苦しむひとや悲しむひとをなくしたい』という思いで活動している。この秋田の全国大会でこの大きな目標に肉薄することを祈念している」と述べた。

日本対がん協会賞の個人の部は、つくば国際ブレスト＆レディースクリニック院長の植野映氏(76)▽介護老人保健施設なぎさ施設長の鎌田収一氏(71)▽元愛媛県立中央病院副院長の佐川庸氏(68)▽霞ヶ浦医療センター特別診療役・名誉院長の西田正人氏(80)の４氏。団体の部は、特定非営利活動法人「生命の駅伝」(いのちのえきでん、上村泰子理事長)が受賞。垣添会長からそれぞれに表彰楯などが贈られた。

特別賞の朝日がん大賞は、日本のがん対策の優先順位づけで、小児がんやＡＹＡ世代のがん研究を主導し、全国規模での基盤整備に貢献した名古屋医療センター上席研究員の堀部敬三氏(73)が受賞。朝日新聞社の中村史郎会長から副賞の100万円と表彰楯などが贈られた。

また、2026年度がん征圧スローガン「がん検診　定期受診は　自己投資」作者の児山さやかさん(ちば県民保健予防財団)と、グループ支部の永年勤続表彰84人の代表として藤井真紀さん(秋田県総合保健事業団)に対し、垣添会長から表彰状が贈られた。

記念講演は、歌手の藤あや子さんが「自分流に生きる～子宮体がんを体験して今伝えたいこと～」と題し、自身の歌手としての活動や、がんと告知されてからの思いや創作活動について語った。

次回の2027年度がん征圧全国大会は熊本県で開かれる。開催地を代表して、熊本県総合保健センター(日本対がん協会熊本県支部)の水足秀一郎理事長は「秋田大会のテーマに込められました思いをしっかりと引き継ぎ、実りのある素晴らしい大会になりますようこれから準備を進めていきたいと思います」と話し、多くの参加を呼びかけた。

がん征圧全国大会記念シンポ　専門家ら６氏が講演

次世代を見据えて 組織型検診導入へ議論



組織型検診をテーマに開かれた記念シンポジウム

2026年度がん征圧全国大会の記念シンポジウム「組織型検診への道のり―実践フェーズに入った日本のがん検診」が９月10日、秋田市のあきた芸術劇場ミルハスで開かれた。対策型検診の対象である５大がん検診の専門家、がん検診関連の施策を担う行政の責任者らが登壇し、それぞれの立場から現状と課題、組織型検診の実現へ向けて意見を述べた。

がん検診には、国が指針を定める「対策型」と職域検診や人間ドックなどの「任意型」がある。「組織型検診」は対策型をより精緻化した検診で、北欧や英国では子宮頸がんや乳がんの死亡率減少が認められている。そのためには有効性の確立した検診に加え、対象の明確化、高い受診率、制度・管理体制の整備、受診者のモニタリングなどが求められるが、現状では日本では国内全体の状況を把握できないことが大きな課題になっている。

協会では、こうした諸課題を共有する目的で組織型検診のシンポを重ねてきた。この日の演者は、演者は、厚生労働省の課長や国立がん研究センターの研究部長、大学教授ら６氏。最新の検診の研究状況や、地域での検診の課題などについて、日本対がん協会がん検診研究グループの服部尚マネジャーを進行役に議題が進んだ。

求められる科学的根拠

はじめに講演したのは厚生労働省健康・生活衛生局がん・疾病対策課長の岩﨑容子氏。「第４期がん対策推進基本計画に基づくがん検診の取組」をテーマに、2040年を見据えた施策の方向性と今後のがん医療のあり方を語った。岩﨑氏は、日本国内で人口構造が変化するなかでの医療体制の国の方針として、どこにいても質の高い医療が受けられる医療の均てん化や、支援態勢、専門的人材の配置を進めることなどを紹介した。

続いて講演したのは、国立がん研究センターがん対策研究所検診研究部長の小林望氏。「科学的根拠に基づく検診―エビデンスづくりの立場から―」をテーマに話した。小林氏は日本とオーストラリア、カナダなどを比較しながら、日本のがん検診の科学的根拠の脆弱性を指摘し、偽陽性などの検診の「不利益」にも目を向けるべきだとしたうえで、組織型検診を目指すなかでのエビデンスを根拠とした体制づくりについて語った。

３人目に講演した東邦大学医学部消化器内科学教授の松田尚久氏は「大腸がん検診を『検査』から『プログラム』へ―組織型検診の実相に向けて―」と題して講演。死亡率が女性で１位、男女で２位となっている大腸がんの医療や、２回の検査から１回の検査に変わる便潜血検査の課題について解説後、大腸内視鏡検査の検診導入の可能性を探る研究データが30年ごろに出るとし、「内視鏡で大腸がんをなくすというところを私たちの試みとして聞いていただきたい」と話した。

「大きな枠組みで意思決定を」

国立がん研究センターがん対策研究所外来研究員の高橋宏和氏は「乳がん検診から考える検査からプログラムへの転換」との演題で、欧米各国で減少している乳がんの死亡率が日本ではグラフが上向きになっているデータを紹介。検診の偽陽性の多さについても触れ、組織型検診に向け、「乳がん検診のあり方は専門のアカデミア、協会


岩﨑容子氏


小林望氏


松田尚久氏

を巻き込んだ議論にできないか。大きな枠組みでの意思決定をする必要がある」と話した。

杏林大学医学部産科婦人科学教授の森定徹氏の講演は「組織型検診の試金石になるか？HPV検査単独法による子宮頸がん検診」をテーマに講演した。HPV検査単独法は、子宮頸がんの原因となるヒトパピローマウイルス（HPV）の感染有無を直接調べる子宮頸がん検診の方法で、森定氏は子宮頚部から採取した細胞を顕微鏡で観察し、がんや異常がないかを調べる細胞診検査と比較しながらHPV検査の状況を話した。

秋田県大仙市健康福祉部健康増進センター主査の佐藤芳樹氏は「住民の命を守る検診体制　現場の思いと期待～保健師の立場から～」をテーマに現場で感じていることを述べた。佐藤氏は、大仙市の検診受診率が伸び悩む現状について説明。「検診状況の把握を進めるのが組織型検診の第一歩」と述べ、業務量とコストの観点から今後の検診行政のあり方について話した。

がん検診

がん検診は、がんを早期に発見し、適切な治療によってがんによる死亡を減らすことが目的。日本では対策型検診と任意型検診がある。対策型は健康増進法に基づき、公共政策として自治体が住民に実施するもので、科学的根拠に基づき、胃、肺、大腸、女性の乳房、子宮頸部を対象に受診年齢や検査方法、受診間隔などが国の指針で定められている。また、自治体は受診状況などを把握することになっている。

一方、任意型は企業が福利厚生の一環で従業員に実施する職域検診、個人が人間ドックなどで受ける検診になる。法的根拠はなく、がん検診として有効性が確立していない検査方法もあるほか、従業員や個人の受診状況を把握することは難しい。

第４期がん対策推進基本計画では、国はがん検診の受診率をより正確かつ精緻に個人単位で把握する▽がん検診を一体的に進められるよう、職域検診の実施状況の把握、法的位置づけも含めたがん検診全体の制度設計を検討する、とされている。

厚生労働省は昨年７月、がん検診のあり方に関する検討会の意見を踏まえ、「がん予防重点健康教育及びがん検診実施のための指針」を改正。市町村が住民へ受診勧奨する際、職域検診の受診状況を集約することなどを盛り込んでいる。

法整備・負担感…課題は山積

パネル討論では、データ収集や現場の体制、負担感など、改めて日本での組織型検診へ向けての課題が共有された。

岩崎氏は「我が国の検診はプレーヤーがたくさんいて、プレーヤーそれぞれが役割を果たすことが大事。全体を俯瞰して、何が組織型検診の肝なのかということを考えながら進めたい」と話した。

小林氏は組織型検診に向かっていくために、「どういう道のりでいくかというところでまず、（自治体が実施する）住民検診をベースに職域検診をどう乗せていくのかを現時点では考えざるを得ない」と話した。その上で、「一番大事なのは、エビデンスのある死亡率減少効果が証明された検診をやること」と述べた。

松田氏は組織型検診について、まずスタート地点で向かっていくべきところだとし、「実現させるために法整備や自治体の負担感への配慮も必要」と話した。また、健康診断や人間ドックで「要精密検査」と判定された対象者に対し、医療機関での受診を促す受診勧奨を誰が進めるのかなどの議論も必要とした。

高橋氏は話し合いを重ねることが必要だとし、「こうした場を利活用したうえで、ゴール地点を定めたうえでそこに向かうという作業を丁寧にやる」と話した。「一過性の流行の言葉で終わらせないように引き続き、ご協力を頂きながら組織型検診を実装していくフェーズにいければ」とも語った。

森定氏は「理想があればこそ」としつつ、まだまだ組織型検診への道のりは遠いと所感を述べた。その上で、「小林先生が強調されていたがん検診の利益、不利益については偽陽性の理解が広く進んだ。正しいものを正しく進めるのがよいと思う」とし、HPV検査と組織型検診を重ねて理解が深まっている現状について話した。

佐藤氏は「医療資源もそうだが、各地域それぞれの特徴があり、その地域でいかに自分の地域にあったかたちで効率的に効果がでるかが大事」と話した。保健師の立場としては、「県をはじめ関係機関と連携しながら、また住民に対しても正しい方法で受診することが大切だとしっかり周知していくことが大事と改めて感じた」と話した。

※シンポジウムの内容は、12月発行の増刊号で詳報します。


高橋宏和氏


森定徹氏


佐藤芳樹氏

日本対がん協会賞・朝日がん大賞　表彰式

がん征圧スローガン・永年勤続表彰も



日本対がん協会賞を受賞した（左から２人目から）植野映氏、鎌田収一氏、佐川庸氏、西田正人氏の代理の金沢秀房氏、上村泰子氏



朝日新聞社の中村史郎会長（左）と朝日がん大賞を受賞した堀部敬三氏

秋田市で開かれた2026年度がん征圧全国大会兵庫大会では、日本対がん協会賞（個人の部、団体の部）と、その特別賞である朝日がん大賞の表彰式が行われ、両賞の受賞者に表彰楯が贈られた。会場からは祝福の拍手が送られた。

日本対がん協会賞は、協会設立10周年の1968年、がん征圧運動の一層の高揚を図る目的で創設された。対がん活動に顕著な功績のあった個人と団体、長年にわたり地道な努力を重ねてきた個人と団体などに贈られる。

2026年度の日本対がん協会賞は個人の部で、つくば国際ブレスト＆レディースクリニック院長の植野映氏（76）▽介護老人保健施設なぎさ施設長の鎌田収一氏（71）▽元愛媛県立中央病院副院長の佐川庸氏（68）▽霞ヶ浦医療センター特別診療役・名誉院長の西田正人氏（80）の４氏が受賞した。この日は西田氏に代わり、茨城県総合健診協会（日本対がん協会茨城県支部）の金沢秀房専務理事が出席した。

団体の部は、特定非営利活動法人「生命の駅伝」（いのちのえきでん、上村泰子理事長）が受賞した。生命の駅伝は30年以上にわたり、市民参加型のチャリティー活動を通じて、がん研究の支援とがん検診の普及啓発に取り組みが、多くのひとをつなぎ、三重県のがん対策を支える大きな力となっていることなどが評価された。

朝日がん大賞は2001年、日本対がん協会賞の特別賞として朝日新聞社の協力で創設された。がん予防の分野を対象に、将来性のある研究も発掘、医療機器類の研究・開発のほか、がん患者の支援などで優れた実績をあげて社会に貢献し、かつ第一線で活躍する個人・団体に贈られる。

2026年の朝日がん大賞は、名古屋医療センター上席研究員の堀部敬三氏が受賞した。堀部氏は、小児がんやAYA世代を専門分野としてさまざまな研究を主導的に進めてきた。小児白血病の治療研究を全国統一で実施に向けて、1996年に小児白血病研究会を立ち上げ、2003年には日本小児白血病リンパ腫グループの設立を主導。全国規模での共同研究を進めるための基盤整備に努め、エビデンスに基づいた小児白血病の標準治療の確立に貢献した。また、2018年には「AYAがんの医療と支援のあり方研究会」（AYA研）を設立した。15～39歳の思春期から若者成人までのAYA世代はがんに発症すると進学、就職、結婚、出産など、さまざまな困難に直面するが、全体の発症率からみると少なく、孤立しがちになるなかで、がんサポート研修など多職種による支援体制の構築を進めた。表彰式では、朝日新聞社の中村史郎会長から表彰楯と副賞100万円の目録が贈られた。

表彰式で、堀部氏は「今回、小児がん、AYA世代に光をあてていただき、深く感謝するとともに感激している。これからも多くの参加者の賛同を得て、支援の質の向上に資する活動を続けてまいりたいと思います。今回の受賞を機に小児がん、AYA世代のがんへ理解が一層進み、支援の輪が広がることを願っております」と述べた。

両賞に続き、2026年度がん征圧スローガン「がん検診　定期受診は　自己投資」の作者の表彰が行われた。作者はちば県民保健予防財団（日本対がん協会千葉県支部）の児山さやかさんで、垣添会長から賞状が贈られた。また、グループ支部を対象とした勤続15年以上の永年勤続表彰では、29支部84人を代表して秋田県総合保健事業団（同秋田県支部）の藤井真紀さんが垣添会長から表彰された。



児山さやかさん



藤井真紀さん

リレー・フォー・ライフ・ジャパン
2026芦屋

芦屋で歩んで20年 全国から参加者集う



拍手に包まれ笑顔で歩くサバイバーの皆さん

がん征圧とがん患者支援のために行われるチャリティー活動「リレー・フォー・ライフ」(RFL)が米国から日本に渡って今年で20年。当初から続く芦屋の地で、20回目となる「RFLJ2026芦屋」(リレー・フォー・ライフ関西実行委員会と日本対がん協会主催)が9月5日夕から6日朝にかけて兵庫県芦屋市のシンコースポーツグラウンドで開かれた。今年もリレーウォーク参加者からシンボルたすきが引き継がれる夜通しの「キャンドル・ラン」などがあり、全国から集まった参加者がこれまでの歩みを語り合った。

患者団体や企業など約30チームが参加。兵庫県内だけではなく、関西各地、遠くは九州や東海、関東からも駆け付けた参加者もいた。この日は、開会式で日本対がん協会の梅田正行理事長らがあいさつ。リレーが始まってから20年の歴史に触れ、先だって9月4日から5日昼まで開かれたRFLJ甲府の実行委員長からの「先を行っているみなさんのおかげでこうして続けていられる」という趣旨の言葉を紹介した。

会場では治療中や退院後の食事や体力づくりに関する講演や、交流テントでのヘアドネーションなどがあった。「リレーウォーク」の参加者からシンボルたすきを受け取った「キャンドル・ラン」では、走行距離に応じて寄付をお願いしており、チーム、個人ともに最後までトップがわからない展開となった。

ランは午後8時30分にスタートし、翌朝の午前8時30分ごろまでの12時間を走り、がんサバイバーらと明け方に夜明け前のもやのかかった紫の空のDawn Purple(ドーンパープル)をみる。競争ではないものの、個人賞でトップとなったのは、西宮市の会社員、古山敏之さん(46)＝91.4キロ＝。チーム賞は、7人で夜を走り抜けた西宮市の「つぶ仲間②」＝144.4キロ＝だった。


古山敏之さん

また、追悼セレモニーでは参加者たちは、がんで亡くなった方や、会場に来ることができなかった大切な人を偲んで黙とうをささげた。城村“KUMA”勉実行委員長(62)は「芦屋の20年は様々な参加者の方の尽力や、サバイバーさん、ケアギバーの皆さん、支援者のおかげ。がんで苦しむひとがいない世界に向け、これからも歩を進めていきたい」と話した。


城村“KUMA”勉実行委員長

リレー・フォー・ライフは「がん征圧とがん患者支援」のためのチャリティ活動。1985年、アメリカの医師ががん患者支援のため24時間走り続け、寄付を募ったことを契機に全世界で広がり、日本国内各所で催しが開かれている。

「一生懸命生きるひとの姿や言葉を伝えたい」

RFLJ福島の横山真さんがジャパン・キャンサー・フォーラムで演説

一生懸命に生きる人の姿や言葉を伝えたい―。リレー・フォー・ライフ・ジャパン福島実行委員の横山真さん(47)が8月8日、ジャパン・キャンサー・フォーラムで開かれた「がんサバイバーの声を聴こう」で講演した。

演説は、認定NPO法人キャンサーネットジャパンなどが中心となって実施している取り組みの一環。今年は定期的に開催されるがんサバイバー・スピーキング・セミナーを受けた32人のうち、横山さんを含む9人がOCT(Over Cancer Together)12期生として選出された。

横山さんのテーマは「出会いと繋がりが与えてくれたもの～孤独を希望に変えてくれた『出会い』～」。福島県郡山市で不動産会社を経営する横山さんは2021年に大腸がんに罹患し、手術や抗がん剤治療、再発・再手術を経て現在経過観察中。演説の冒頭で当時の不安や孤独を「気が付くと私は毎日のように再発率、生存率、そんな情報を検索していました。不安を消したくて調べていたのに調べれば調べるほど不安になった」と振り返った。

横山さんを変えたのはネット上で見た男性サバイバーの動画だった。自身と家族構成が似ていて強く共感した。「『たとえ、残された時間が少なかったとしても、大切なのはその時間をどう生きるか』という言葉を聞いた瞬間、わたしのなかでなにかが変わりました」


演説する横山さん

その後、「このまま終わるわけにはいかない、負けたくない」と、ピアサポート、リレー・フォー・ライフ、がん教育などの活動にかかわるように。多くの仲間と出会い、「一人の言葉によって変わることができた」という。

横山さんは演説の最後にこう力を込めた。「みなさんにお願いがあります。周りに懸命に生きている方がいたら応援してあげてほしいんです。そして、可能であればその方々を発信してあげて欲しい」

2025年人口動態統計（確定数）

がん死亡は37万8829人　全体の23.8％

がん種別の最多は肺がん

厚生労働省は９月、2025年の人口動態統計（確定数）を発表した。６月に公表した人口動態統計月報年計（概数）を修正した。死亡数は158万9533人で、前年の160万5378人から１万5845人減少し、５年ぶりの減少となった。人口１千人あたりの死亡率は13.3で、前年と同率だった。男女別では男性が14.0（前年14.0）、女性が12.7（同12.7）となっている。

死因別の死亡数は、がん（悪性新生物〈腫瘍〉）が37万8829人で死亡総数の23.8％を占めた。がんは1981年から死因の第１位が続いている。人口１千人あたりの年齢調整死亡率は男性が13.9（同14.2）、女性が7.7（同7.8）で、いずれも低下した。

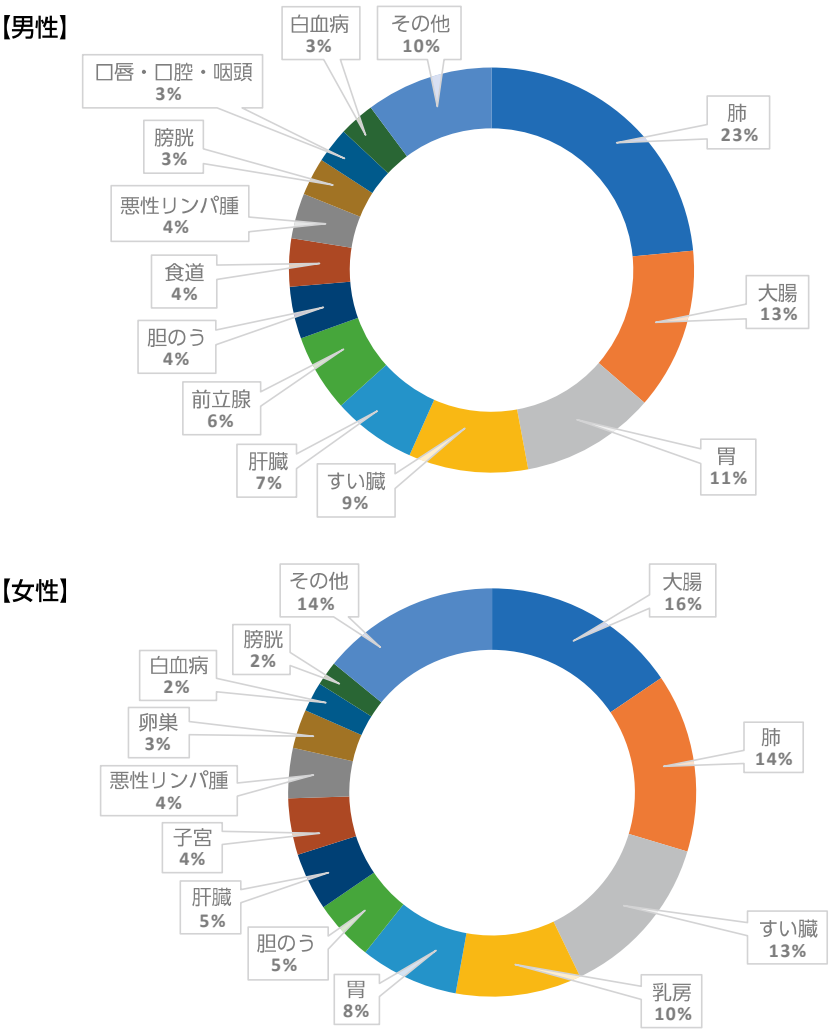
がん種別の死亡数は「気管、気管支及び肺」が７万3935人（男性５万1150人、女性２万2785人）で最も多かった。次いで「大腸（結腸、直腸S状結腸移行部及び直腸の合計）」の５万3087人（男性２万8122人、女性２万4965人）▽「すい臓」４万2079人（男性２万772人、女性２万1307人）▽「胃」３万5922人（男性２万3371人、女性１万2551人）▽「肝及び肝内胆管」２万1971人（男性１万4631人、女性7340人）が続いた。

男女別にがん種別の死亡数をみると、男性は「気管、気管支及び肺」「大腸」「胃」「すい臓」「肝及び肝内胆管」の順で多かった。一方、女性は「大腸」「気管、気管支及び肺」「すい臓」「乳房」（１万6024人）「胃」の順となっている。

死因別の死亡数の第２位は、心疾患（高血圧性を除く）の22万539人（男性10万9125人、女性11万1414人）で、死亡総数に占める割合は13.9％（前年14.1％）。第３位は老衰の21万4712人（男性６万1736人、女性15万2976人）で、死亡総数に占める割合は13.5％（前年12.9％）だった。

新型コロナウイルスの死者数は、前年の３万5865人から２万1496人に減った。

主な部位別がん死亡割合



2025年人口動態統計（確定数）より作成

胃・肺併用Ｘ線デジタル検診車「しらかば211号車」を導入

日本対がん協会北海道支部

北海道対がん協会は、このほど新たな胃・肺併用X線デジタル検診車「しらかば211号車」を釧路がん検診センターに配置した。配備は４月24日付。

協会は老朽化により、新たな胃・肺併用検診車の更新整備を計画していた。公益財団法人JKAの「競輪公益資金による補助事業」で、製作費8,525万円のうち3,800万円の補助を受けて実現した。

協会によると、この検診車は、フラットパネル方式を用いた胃がん撮影装置を搭載しており、従来の撮影方式に比べ、画像の歪みやムラがなく鮮明になり、読影の精度が良くなることから、胃がんの早期発見が期待できるという。



北海道対がん協会の担当者は、「新たな検診車などを用いて広大な北海道内を隈なく巡回し、北海道民の健康の保持増進に努めていきます」と話している。

ピンクリボンフェスティバル2026　トークショーとミニライブ開催

矢方美紀さん、麻倉未稀さんをゲストに「オープニングナイト」

乳がんに関する正しい知識の普及啓発と乳がん検診による早期発見・適切な治療の大切さを伝える「ピンクリボンフェスティバル2026」が10月１日、開幕した。日本対がん協会や朝日新聞社などでつくるピンクリボンフェスティバル運営委員会の主催。初日は東京都千代田区の有楽町朝日ホールで「オープニングナイト」があり、約400人が来場した。ステージでは、声優でタレントの矢方美紀さんによる若年性乳がんの経験や遺伝子検査の体験について話すゲストトークや歌手の麻倉未稀さんのトークとミニライブがあった。

矢方さんも麻倉さんも、乳がんサバイバー。SKE48で活躍した矢方さんが、乳がんを患っているとわかったのはSKE卒業後で、きっかけは９年前、家に帰ってテレビをつけた際に乳がんのニュースを見たことだった。「まだ25歳なので、40代以降で検診を心掛けなくては」と思って見ていたが、若年性乳がんという言葉がでてきた。

左胸を触ると固いしこりがあった。知人から背中を押されて医療機関で受診したところ、がんだと告げられた。2018年４月、当初ステージ１の乳がんと診断され、手術前にステージ２B、左乳房全摘出・リンパ節切除の手術を受けステージ３Aだとわかった。病気のリスクや薬の効きやすさなどを調べる遺伝子検査も経験した。若くして罹患したため将来的に右胸にもできる可能性などを説明され、考えたうえでの決断だったという。治療費は保険適用はなく、20万円で高いと感じたが、「結果がわからない遺伝子もいくつかあったが、遺伝性乳がん卵巣がん（HBOC）ではないことはわかった。そういうこともあるんだ」と納得したという。その上で、矢方さんは「25歳で乳がんになるなんてと思ったし、自分ごとにすることが難しい時期があったが、自分自身で道を選びながらここまできた。みなさんも自分は大丈夫と思うかもしれないが、まずブレスト・アウェアネス（乳房を意識する生活習慣）などで自分は大丈夫かなと気づいて欲しい」と話した。

聖路加国際病院遺伝診療センターで、がん領域の遺伝カウンセリングに従事する認定遺伝カウンセラーの鈴木美慧さんもトークに加わった。鈴木さんは矢方さんの検査結果について、HBOCを診断するBRCA１／２遺伝子検査は陰性だったが、その他のがんなども網羅的に調べる多遺伝子パネル検査（MGPT）で病的意義不明（VUS）がいくつかあったのでは、と説明。HBOC診断を目的としたBRCA１／２遺伝子検査の保険適用は以前から開始されており、今年は第１度近親者へ拡大されている。「遺伝子検査は、治療をどう考えていくかをはじめ、その先の人生を考える入口。世界中で蓄積されたデータにより数年後に解釈がかわることもある。希望する場合は、まず遺伝カウンセリングを実施している病院を探してみてつながれるといいと思う」と話した。

後半に登壇した麻倉さんは３年連続の出演。2017年、テレビ番組出演をきっかけに乳がんが見つかり、全摘手術を受けたが、術後３週間でステージに復帰。「番組の企画がなければ進行していたかもしれない」といい、治療は今年で10年目となる。現在は、精力的に音楽活動を続けながら、2018年に地元で「ピンクリボンふじさわ」を設立し、NPO法人「あいおぷらす」の理事長としても乳がんを中心にがん患者・家族らの心のケアを行いながら乳がん検診の啓発にも取り組んでいる。2026年にデビュー45周年の節目を迎え、ミニライブではドラマ主題歌でヒットした「HERO」や新曲「My Soul」など４曲を熱唱し会場を盛り上げた。

矢方さんと麻倉さんはステージ後、AYA世代のがんについて報道陣に語った。麻倉さんは「矢方さんが発信することで、『私は一人じゃない』とわかる。それは日々の暮らしで非常に大切なことで、AYA世代で元気に活動している矢方さんをみると私もうれしい」と話した。矢方さんはがんを経験したSNSのコミュニティーで、同世代で仕事の悩みだったり恋愛の悩みだったりを話し合うこともしているといい、「若いからこそ、将来の不安もあるが、そのなかで自分の夢を諦めずに活躍している。ぜひ、いま頑張っている方や、もし病気になった方も前向きに過ごしていただきたいと思う」と話した。



出演した（左から）原元美紀さん、麻倉未稀さん、矢方美紀さん



鈴木美慧さん

この日の進行役はフリーアナウンサーの原元美紀さんが務めた。大腸がん経験者で、がん検診を呼びかける活動にも取り組む。会場ロビーでは、乳がん啓発や患者支援に取り組む団体がブース出展して啓発資料などを配布し、来場者でにぎわった。トークショーの様子は後日、公式サイト（https://pinkribbonfestival.jp/）で公開される。

公式サイトでは10月１日から乳がん専門家による「シンポジウム2026～最新の乳がん医療トピックス～」を公開中（https://pinkribbonfestival.jp/festival/feature/1268/）。東京都内や神戸市では期間中、ランドマークを啓発カラーのピンク色の光で照らす「ピンクライトアップ」のほか、乳がん検診の受診やブレスト・アウェアネスの実践を呼びかける街頭キャンペーンが行われる。

ブレスト・アウェアネスって何だろう？

東京の銭湯100軒で「気づきの湯」





松本湯で行われている「気づきの湯」

「気づく力」をアップデートしよう――。普段意識しにくい「乳房の健康」に気づいてもらおうと、ピンクリボンフェスティバル運営委員会（日本対がん協会ほか）は９月25日、東京都中野区東中野５丁目の銭湯「松本湯」を中心に「気づきの湯」という取り組みを始めた。今回の取り組みはピンクリボンフェスティバルの一環。ポスターやモニター映像、シールなどで、銭湯にきた人に「何だろう？」と意識してもらいブレスト・アウェアネスの理解を深める狙い。取り組みは10月31日までで、協力を表明した都内銭湯100軒で実施する。

生活の中で「いつもと変わりないかな？」という気持ちで、乳房を見る・触る・感じるブレストチェックを習慣にしやすいのが入浴の時間。自治体管轄の銭湯を訴求すべき対象にアプローチできる媒体として検討を進め、今回、東京都保健医療局、東京都公衆浴場業生活衛生同業組合の理解を得て都内銭湯を選んだ。

松本湯では入り口に「気づきの湯」と書かれたのれんをかけてもらい利用者の意識を喚起。脱衣所のポスターや、浴室内の鏡やからんに貼ったシール、女湯の大型モニターに映し出される啓発動画などを通して乳房の健康について考えてもらう内容となっている。啓発ポスターや動画には、20代で乳がんを経験した元SKE48の矢方美紀さん（声優/タレント）を起用し、若いうちからブレスト・アウェアネスを始める大切さを伝えている。男湯の脱衣所のパネルには「女性も男性も『ブレスト・アウェアネス』が大事です。」と記される。休憩室などにも気をつけるべきポイントが書かれた冊子を置き、持ち帰ってもらう。

９月26日には利用者を対象にブレスト・アウェアネス認知度調査を実施した。ほか都内99カ所の銭湯でもデジタルサイネージで15秒の啓発動画が流される。銭湯によってはブレスト・アウェアネスの４つのポイント「①普段の乳房の状態を知る②しこり、痛みといった乳房の変化に気を付ける③変化に気づいたら、すぐに専門医へ相談④40歳になったら２年に１回、乳がん検診を受ける」を紹介するポスターを掲出し、啓発冊子・ステッカーの配布などを実施する。※実施内容は施設によって異なる。

厚生労働省によると2023年の乳房のがんの罹患数は10万3424人（男性832人、女性10万2592人）に上る。また同年データに基づく累積がん罹患リスクでは、生涯で日本人女性の８人に１人が乳がんに罹患する。日本対がん協会の担当者は「乳がんは日本人女性の場合30代から急増し女性のがん罹患数で最も多い。自分で気づくことができる可能性がある数少ないがんで、乳がん発見のうち約５割は自分でみつけたというデータもある。多くの人にブレスト・アウェアネスを知ってもらい、乳がんで命を落とす人を減らしたい」と話す。

問い合わせは、ピンクリボンフェスティバル運営委員会事務局へ。
日本対がん協会内　contact@pinkribbonfestival.jp

11月に大阪でがんを学ぶ研修

日本対がん協会が参加者募集

がんについての理解を深め、患者、家族のほか、多くの人に身近に考えるきっかけにしてもらおうと、日本対がん協会などは11月８日、大阪市の扇町ミュージアムキューブで、「がんを正しく知りがん対策を学ぶ研修2026 OSAKA」を開く。認定NPO法人がんサポートコミュニティー、大阪対がん協会との共催で、初の大阪開催。当日は、がん専門医や支援に携わる専門家、がん体験者による講演のほか、映画上映や企業によるブース出展なども予定している。

研修は、これまで認定NPO法人がんサポートコミュニティーと日本対がん協会の共催で東京を中心に開催してきたが、2026年度は新たに大阪対がん協会を加えた３団体共催となった。

参加無料、定員200人。先着順で、定員になり次第締め切る。

催しの詳細、参加申し込みはホームページで。
https://csc-japan.org/training/